

「地域連携型アートプロジェクトの可能性」
Artist In Residence/ トリエンナーレ・ビエンナーレ・芸術祭の試み

田中 綾子(東京工芸大学特別講師)

・アーティスト・イン・レジデンスについて

アーティスト・イン・レジデンス(以下AIRと記)とは、国内外からアーティストを一定期間招聘し、滞在中の活動を支援する事業のことである。アーティストが異なる文化や環境で創作活動を行うシステムを総称する。AIRはアーティストが「創作の場の提供や支援」を受けるという事だけでなく、招聘を行う地域にとってもメリットがある。廃校や空き家をAIRとして再利用したり、地域住民とアーティストが交流することで、地域の活性化や文化貢献につながる。オランダに本部を置く国際的なAIRネットワークサイト「Res Artis」(<http://www.resartis.org/>)に登録されているだけでも世界中に550のAIR組織があり、その対象分野も美術・音楽・舞台芸術・建築・文学・映像・写真・デザイン・伝統芸能など多岐にわたる。

日本でのAIR事業は、90年代から盛んになり、自治体主導で進められてきた。文化庁が1997年に自治体の参画を条件に「AIR助成事業」を開始。これは3カ年で終了したが、2011年に再びAIR助成事業「AIR活動支援を通じた国際文化交流促進事業」を開始。こちらでは、自治体のみならず民間企業やNPOも申請が可能になった。但し、国際交流があることが条件となった。自治体運営の大型AIR施設の多くがこの助成を受けている。

日本のAIRに関する情報は、国際交流基金が運営するサイト「AIR_J」(<http://air-j.info/>)に集約されていて、AIRの募集やAIRに関するシンポジウムの記録・インタビュー記事などが見られる。<特定非営利活動法人アートNPOリンク>によるアンケート調査「アートNPOによるAIR事業の実態調査」(2015年)によれば、回答のあった524のアートNPO法人の内、AIRを実施している団体は113件である。「AIR」と一言で総称するものの、支援内容・助成の有無・施設の充実度・応募と選考の仕方・招聘人数などの事業内容は様々である。一概には言えないが、傾向としては、都市部のAIRは、小規模でアトリエやスタジオのみの提供というのが多く、地方のAIRは宿泊施設や展示スペースも完備していて、支援や助成も豊富などところが多いと言える。

本発表では具体的な事例として、主に大学との連携がある二つのAIRを取り上げた。一つ目は茨城県守谷市の「ARCUSプロジェクト」(1994年～)である。ここは廃校にな

った小学校を利用しており、対象は現代美術で、毎年3名の若手アーティストを国内外から3ヶ月間招聘している。東京藝大取手校と近く、連携プログラムも多数ある。日本のAIRの草分け的存在で、若手アーティストの登竜門とも国際的に認知されている。もう一つは青森市の「青森公立大学国際芸術センターACAC」（2001年～）である。青森公立大学が運営母体であり、青森公立大開校に合わせて同大学敷地内に設立された。AIRがメイン事業のため、施設（展示スペースや工房、宿泊）の充実度は高い。対象は現代美術で、年に3回のAIRがあり、春・夏は推薦及び指名、秋は公募となっている。秋の公募AIRは、ACAC側が提示する企画展のテーマに対し、アーティストが展示の企画書を提出することが求められる。ここから審査され、国内外のアーティスト4～5名が選出。AIRでは展示に向けた制作が行われる。

・ トリエンナーレ・ビエンナーレ・芸術祭 「地域アート」 - 「物質」から「媒介」へ

2000年頃から地域の名前を冠するアートイベントが盛んになった。（「大地の芸術祭越後妻有アートトリエンナーレ」や「横浜トリエンナーレ」などに代表される。）現在、日本では大小あわせて100を超える地域アートイベントが開催されている。この地域名を冠するアートイベントを「地域アート」と呼び、「現代アート」から派生した新たなジャンルとして考え、批判的に再考しようという動きも出てきている。

「地域アート」が盛んになった理由としては、地方都市の活力減退と疲弊、人口減少、少子高齢化、過疎化、郊外型ショッピングモール台頭による中心部の空洞化、街の画一化、空き家問題などがある。これらの問題の打開策として地方自治体は「アートイベント」に期待。つまり多くのアートイベントは地域活性化の起爆剤として税金を投入するという、行政主導で始まった公共事業であると言える。ゆえに最初から、「地域活性化」という役割を担わされることになった。行政の公共事業が「箱物」（公共施設建設）から「消え物」（芸術祭）へ移ったとも言える。

「地域アート」では、作品はその地域の調査や交流から制作され、鑑賞者参加型の作品も多い。アートは作品・展示物の「物質」というだけでなく、人と人、地域とアーティストの「媒介」にもなっている。

本発表では、今年初開催の二つのアートイベント「さいたまトリエンナーレ」と「KENPOKU ART 2016 茨城県北芸術祭」を具体的事例として取り上げた。どちらも国内外から有名なアーティストを招き、市内/県内の数カ所で展示が行われた。展示会場は、歴史的な建築物や屋外なども使用された。展示会場の場所性（土地、建物、景色）を生かした作品が多い。

このように次々と新たなアートイベントが日本各地で開催されている一方で、開催回

数を重ねた芸術祭はマンネリ化が懸念されてもいるし、また経済的理由から打ち切りになる芸術祭も出てきている。芸術祭はいま転換期をむかえていると言えるだろう。

参考資料

- ・『世界のアーティスト・イン・レジデンスから』サムワズガーデン（2009年）
- ・『アートNPO データバンク 特集アートNPOによるアーティスト・イン・レジデンス事業の実態調査 2014-15』特定非営利活動法人アートNPO リンク（2015）<http://arts-npo.org/artnpodatabank.html>
- ・『地域アート』藤田直哉編・著、堀之内出版（2016）
- ・『ひらく美術—地域と人間のつながりを取り戻す』北川フラム著、ちくま新書（2015）
- ・日本全国のアーティスト・イン・レジデンス総合データベース AIR_J（国際交流基金）
<http://air-j.info/>
- ・世界規模の会員制レジデンスネットワーク「ResArtis」<http://www.resartis.org>
- ・国際芸術センター青森 ACAC (AIR) <http://www.acac-aomori.jp/>
- ・アーカスプロジェクト茨城県守谷市 (AIR) <http://www.arcus-project.com/jp/>
- ・さいたまトリエンナーレ <https://saitamatriennale.jp/>
- ・茨城県北芸術祭 <https://kenpoku-art.jp/>